



二刀巻の侍
二刀得

著：神堂効

Midou gai

イラスト：やすゆき

Yasuyuki

原作：あるてみす。



ぶちばら文庫

「見るのは構わないけど……少し離れていたほうがいいわよ？ うっかり……首を撥ねてしまうかもしれないから」

少し間を置く家高を愉快そうに見遣りつつ……村正は再び剣を振り始めていた。

※ ※ ※

「子作り、か……」

果たして上手くできるのだろうか、という気持ちは、ある。なにせ、つい先だってまでは子種どころか勃起すらもままならなかったのだから。

「まあ、なるようにしかならん、か……」

はん、と膝のあたりを手でひとつ打って、気合のようなものを入れた。

「へえ……私を選ぶなんて、そうそう馬鹿でもないのね、あなたも」

寝所を訪れた村正は、開口一番にそう言っただけで晒った。

「いや、まあ、なあ」

お決まりに曖昧な返答を返す家高。

村正に明確な恋慕があつての選択ではなかった。虎徹には虎徹の良き部分は様々にあるが、やはり……夜伽のことに限って言えば、村正に長があると考えるのは当然のこ

とだろう——。

(いや……)

それだけでは——ないのではないか——？

家高の……自らも与りの知れぬ不明な感情が、また胸の内できくり、と音を立てたような気がするのだが。

「なあに？ また……ぐちぐちと考えるような顔をして。私……そういうの、嫌いだわ」

「す、すまん」

「ふふ……」

村正の真つ直ぐな瞳には……これ以上の会話を求めていないとはつきりと書いてある。

「と、いうわけで！」

「う……うおっ！」

言うや否や、村正によつて布団に押し倒された。

「うふふ……早速、始めましょうか」

長い髪を指先で梳きながら、村正が艶美な笑みを浮かべる。障子に濾された月光に浮かぶような村正の面差しは、幻想的と言っていいくらいに美しい。

「ふふ、緊張しているな？」

「そ、そりゃな……」

既に彼女たちとの交わりは三度になる。なるが……こうして村正と一対一で、というの

は初めてのことなのだ。

もとより女との情交に疎い家高にすれば、村正の妖艶さは、一種、恐れじみたものに近いものすら感じてしまう。

「心配するな。私が優しく教えてやろう……血筋の残し方……子供の作り方を、な」
類へそつと手を伸ばしてくる。虎徹と家高を奪い合うようにしている時のものとは、まるで別人のような、優しげな仕草——。

「……ただ」

「ただ？」

にまり——と。村正は笑んだらうか？

「……まずは、あなたのこれをもつとよく調べさせてもらおうよ」

一転、強引なまでに……正しくひつつかむようにして、村正の手が下肢に伸びてきた。

「な、なにを……？」

「ふふん、見たらわかるわよっ」

言うなり村正は自らの衣服をはだけさせてくる。まろび出る、白く大きな乳房。

「ふふ、準備完了！ とりやつ」

「わっ……!!」

家高がその乳房に目を奪われる暇いとまもあれば、その虚をついて、襲いかかってきた。

……前言は撤回。そんな今までと変わらないノリだったようだ。

「ふむ……」

豊満な胸。村正はそれを用いて両側から肉棒を挟む込み、圧倒的な弾力で責めてくる。

「なんだ、乳房に挟んでみても、中々勃起しないのね……」

村正の言うとおり、肉棒は反応を示さなかった。

「これではまるで、私が小さい者をいじめているみたいねえ……」

「ち……小さくて悪かったな！ というか、これはどういう意味の行為だ」

確かに……豊満な肉に包まれる感覚は、心地よい。単純な刺激そのものとすれば、家高もすぐさま勃起していたであらうが……。

最初の足コキから始まり、前夜のフェラチオからディープスロート……どこの騒ぎでもない。パイズリなどという言葉そのものがこの時代には有り得ないのだ。まして性行為に疎い家高にすれば、まずは何事かと困惑するのみ。

どうも村正の性行為は、基本的に百年単位で歴史を先んじているようだ。

「大丈夫よ。私がすぐに大きくしてあげるから。この胸で、ね……ん、んんっ……ああっ

……ん……はあ……ああ……んん……」

しかし、さすがは村正か。困惑する家高に構わず、微笑みながら胸を上下に動かし始めた。挟まれた家高の肉棒には、柔らかい肌の弾力と、擦れる刺激が伝わってくる。

「ふふ、どう？ んっ……こうされるのは、初めてでしょ？ 凡百な女は胸で擦るなど思いませんし、いいでしょうし……」

「あ、ああ……そうだな。初めてのことだ……」

実のところを言えば、過去に家高の勃起を促すための夜伽の上で、足コキはともかく、口淫——尺八を試す女くらは居た。

居たが、家高が不能であったことを踏まえた上でも、それ程にそそる行為とも思えなかった。手で摩られるのと大差はないと……。

村正の口淫は、そういった女中たちの行為とは、そもそも次元が違っていた。

その彼女が、今夜してみせてきたのは、今度はこうして乳房を使つての愛撫だ。当初、驚きはしたものの、家高は快樂刺激以前に、その……わくわくするような行為に、だんだんと昂ぶりを見せていた。

「なら、じっくりと味わいなさい。私の胸の感触を……はああ……いまだ眠る肉棒で……んうう……あ、ああ……ふう……」

左右の乳房が、さらに肉棒に押し付けられる……。

「ふふっ……早く大きくなさいな……。もつともつと、色々と愉ませてあげる……」

「愉ませる……とは？」

「それは、この後のお楽しみよ。で、どう？ 興奮してきたでしょ？ んんっ……」

言われるまでもなく……家高は期待に胸と同じく股間を膨らませつつある。

村正のする行為は——楽しい。驚きもあるが、それ以上にわくわくとする。

「ん、んんっ……ああっ……ふうう……徐々に……肌を、押し返すようになってきたわ



ね……んあつ……あ、ああ……」

村正の言うように、乳房の谷間からゆるゆると家高の皮被りの亀頭が顔を覗かせてくる。「もつと……もつと大きくなれ……そうしたら、きちんと挟めるはずよ……ん、んん……はああ……んあつ」

村正自身も昂ぶっているのだろうか？ 自然……胸の動きも早くなっていく。挟み込む力も強くなり、指が乳房に埋もれるくらいなほどに。

「ん、んう……あんたの……私も胸から、はつきりと感じるように……なつたわね……あと……一息というところか……。そろそろ、皮をかぶつたままでは不満でしょ？ 私の胸で……剥いて……あげる……ん、んんっ……」

村正もどこかその行為に酔うような有様のように、胸を巧みに使って、いまだに未発達な肉棒の皮を剥いていく……。

「ん、あ、ああ……中から……真つ赤な……ふふっ、剥き身の刀身が……んあつ……あ、ああ……ん、んう……あああ……」

村正に剥かれ、扱かれ……ゆっくり肉棒が大きくなっていくのが、わかる。そして、家高の勃起と比例するかのように、彼女自身の興奮も大きくなっていくかのようだった。

「ふふ、胸の中で大きく膨らんで……んん……やつと頭を出したか……んあつ……」

家高の肉棒は、いまや完全に勃起した。大きな村正の胸の谷間から、その雄々しき姿を見せるに至っている。

「やつと、しつかり観察できるな……。ふむふむ……形はまあまあね……先つぼの色は、幼い色をしているけど……ん、あつ……あああ……んああ……」

しげしげと……その勃起し露出した肉棒を、乳房で押さえ込んだそのままに観察してみせる村正。

「よ、よせ……」

その気恥ずかしさに、思わず赤面してしまう家高。

「別にいいでしょ？ じっくり見るぐらい……こうして……私が……大きくしたのだから……ん……はああ……」

「お……おうっ」

再度、村正の生暖かい吐息が亀頭に掛かり、震えてしまう腰を押えることもできない。「こらっ！ 逃げないのっ！ これはもう……私のもなのよ？ もつとちゃんと見せなさいっ。ん、んう……あ、あああ……あつ……んっ……んああ……」

逃げるように跳ねる肉棒を、必死に押さえ込もうとする村正。「観察する」というのは方便……またぞろ家高を羞恥させようとする意図かと思えば……実のところ、彼女の的にも本気で観察をしていた部分もあったのかもしれない。

「この胸が良いのでしょ？ 逃げ出せば……これ以上の快感は体験できないわよ？ ん、んう、あ、ああ……」

「い、いや……別に逃げるつもりはないのだが、つい……」

「先端の割れ目から……汁がうっすらと出てきたわね……もつと、たくさん……」
しげしげと……亀頭を見つめる村正。紅の差した頬が、ひどく愛らしい。興奮を隠せずか、荒めになった吐息が鈴口をすうすうと掠める。

「ふふっ……私の息が当たっただけで……震えているじゃないの……ふふっ。ほらっ、ほらっ……私の胸……気持ちいいんでしょ？ ん、んんっ……はぁ……もつと強いのがいい？ んあっ……あぁっ」

やがて……上下だけではなく、左右の動きも加わる。その不規則な動きに、家高の快楽は、益々と高まっていく。

「どうだ？ 私の胸に肉棒全体を弄ばれる……感触は……あぁ……ん、あつ……んあぁ……あ、あぁ……はぁ……」

「き、気持ちいいけれど……」

もどかしい。それが正直なところだった。確かに胸に揉みしだかれるのは心地よい。しかし……村正の行為としては、些か大人しくも感じられたが……。

「ふふっ。わかったわ……じゃあ……」

恐らくそれも織り込み済みであったか。村正は家高のそんな反応も知っていたかのように、次なる行為にうつる。

「ん、んんう……れろれろ……ん、ちゅ……ちゅる、ちゅぶぶぶ……ちゅばぁ……」
舌先を亀頭に這わせる。

「う、うおっ」

途端……家高の男根全体に、甘い痺れがはしった。

「ん……ちゅ、ちゅる、ちゅるる……ちゅばぁ……ちゅぶぶ……ちゅば……んーちゅ、ちゅちゅ……」

男性器全体が圧迫され、程よく充血しているせいだろうか。昨夜の口淫よりも強い快感が家高を貫く。

その家高の反応を良しと見た村正は、尚も舌先を這わして、亀頭を愛でていく。小刻みに動かした舌で、汁を垂らす敏感な鈴口を刺激してくる。

「んふうう……舌で触つてもわかる……熱くなってる……ん、んう……はぁ……」

時折、わざと家高に上目の視線を送りながら、肉棒を舐めていく村正。そのねつとりとした視線までもが……家高の快感を助長しているのだ。

執拗な舌の責めと、肉棒を舐める、献身的にすら思えるその姿……。家高はいっそうに昂ぶり、早くも限界に近いものを感じ始めている。

「さらに太く……固く……なってきたじゃないの……ん、ちゅう……ちゅるる……ちゅる……んちゅ、ちゅ……ちゅばぁ、ちゅぶ」

肉棒の根元が甘く疼き、睾丸がきゅっ……と縮み上がるような気配すら、感じられる。

「女に……舐められるのは気持ちいいでしょ？ れろ、ちゅる……ちゅるる……ちゅばぁ」
挑発的な視線。村正は喘ぐようにしている家高に見せつけるように舌を大きく出し……

より大胆に肉棒を舐めていく。

「舐められているのを……見るのも……気持ちいいでしょ……ん、んんう……はああ……ちゆる、ちゆるる……ちゅぶ……」

「ふあっ、ううっ」

あまりの甘美な光景に、家高の理性がつうつうと失われていく。赤い蛇のように、這い回る舌先。甘美なその誘惑。

「どこを舐められるのが……いいの？　ここ？　んーちゅ、れろれろ……それとも、ここ？　んちゅ、べろっ」

亀頭から、裏筋へ、裏筋から、根本へ――。

その奔放な動きに、益々翻弄されるだけに成り果てる家高。

「それともここが良いのか？　ん、んんっ……んちゅ……ちゆるる……ちゅば……ちゅぶぶ……んー、じゅっ……じゆるる……」

「はぐうう！　あっ！」

終には亀頭の割れ目に舌を入れてくる。そして……そのまま、急激に吸われた。

「そうか……ここが好きなのね……はああ……ちゆる、ちゆるるる、ちゅば……」

家高の弱点を見るや、嬉しそうに執拗に舌先で弄つてくる。
「ちゅぶ……ちゅ……ねえ、我慢できなくなってきたんじゃない？　顔が熱くなって……肉棒が震え始めて……んんう……んじゅ、じゆる……じゆるる」

「うっ……ああっ」

言われるまでもないこと。家高にすればそれに応えられないのは、最早意地だとかそういうものですらない。言葉をする余裕もないだけだ。

「別に……我慢できなくなってきたら……遠慮なく……私に……ぶっかけても……んちゅ……ちゆる、ちゅばば……んじゅ……」

「う、うっ……」

言われるまま、村正の端正な面差しが白濁で汚れる様を想像してしまう。

「うっ……口の中で……跳ねた……そんなに……私の顔を……汚したいのか？　じゆる、じゅば……じゅぶぶ」

村正の面差しが美しければ美しいほどに……それが己が子種で汚れた様は背德的であり……なにより猥雑な絵、だ。

「大きくなりすぎて……私の胸でも溢れてしまっそうだな……ん、んじゅ……ちゆるちゅ……ちゅばば……ちゅぶ……んじゅー、じゆるじゅ……」

家高は挟みつける乳房に、舐める舌先に、覗き込むような視線に、卑猥極まりない水音に……。その全てに翻弄されていく。

「もう……口の中が……体液の味で……いっぱいよ……ん、んんう……はああ……段々と美味しく感じてきた……。未熟で……青々しくて……癖になりそうな……んあっ……ああ……んじゅ、じゆる……」

唾液と先走りの汁、そしてお互いの汗……。それらの体液にまみれて滑りのよくなったのを見てとるや、村正はいっそうに乳房での刺激を早める。

「んう……。ほら、ほらあつ……。！ 快楽に……。身を任せてしまえ……。んあつ……。ああ……。んああ……。ん、んう……。！」

ぎゅつと……。一段と強く、挟み込む二つの柔肉。

「く……。あつ！」

それがとどめ、と言ってよかつたのだろう。

決壊した鈴口から……。激しく精液が噴出した。

「あつ……。ああ……。もつと……。もつと……。最後の一滴まで……。私の胸で……。出すんだ……。ああ……。んんっ……。はああ……。んああ……。あ、ああ……。！」

先の想像のとおり——いや、それ以上の勢いで、白濁は村正の美貌を犯していく。村正もまた、その射精を更に促すかのように、乳房で尚も肉棒を扱きたてる。

「ああ……。んんう……。まだ……。出てる……。出てる……。熱いのが……。たくさん……。！」

家高もまた……。そんな村正に応えるように、射精を続けていたのだ。

「はああ……。もう……。終わりか……。これで……。全部か……。ふうう……。あ、ああ……。！」

ようやく射精が終わると、吐き出された精子によつて村正はすっかりと汚れていた。整った面差しも……。濡れ羽の黒髪も、そして……。その大きな乳房すらも。

「ん、んう……。はああ……。ふうう……。あ、ああ……。精液が零れていく……。ああ……。ん、

んぐつ、あむ……。んんう……。！」

余韻に浸っているのだろうか。村正はうつとりした顔のまま、あられもなく舌先を出し己が顔から落ちていく精液を舐めとつていく……。

「んんう……。途中の舐めた味と同じ……。苦い……。ああ……。んん、んんう……。でも……。すぐく濃厚ね……。！」

正に恍惚という表情でつぶやいている間も、端正な顔からは精子が流れ落ちていく……。

「ん、んう……。はああ……。次回はこれを……。たくさん……。貰うとしよう……。！」

余韻の快楽に酔いしれつつ、村正が笑う。

「村正……。！」

家高の目に、そんな村正の姿は……。とても美しく見えたものだった。



ぶちばら文庫

にとうお いっとう え
二刀追うものは一刀も得ず

2011年 6月30日 初版第1刷 発行

- 著 者 神堂効
- イラスト やすゆき
- 原 作 あるてみす。

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©GAI MIDOU ©ARTEMIS

Printed in Japan 2011

PPO19

原作ライター「天姫あめ」氏による
描き下ろしエピソードも収録。
追加挿絵は漫画家「牧だいきち」氏です！

累計
5万人の弟の皆様お待たせしました。

姉さんSMKED!

おし♡おし♡

ふちばら文庫01
沖田和彦 著
すめらぎ琥珀 画
定価 670円(税込)

好評発売中

ぶちばら文庫04
沖田和彦 著
すめらぎ琥珀 画
定価 670円(税別)

姉のSweet!2

弟よ、もっと♡甘えなさい!

原作ライター「天姫あめ」氏による
描き下ろしエピソードも収録。

追加挿絵は漫画家「牧だいきち」氏です! 好評発売中

パラダイム **ぷちぱら文庫** は ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。

応募規定は、それぞれ以下ようになります。

皆様のご応募をお待ちしております!

1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方のみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間～1か月ほどお時間がかかります。

4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。メールの宛先: desk@parabook.co.jp

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。